

日本の未来のために

「明治改元からの日本の歩み」



愛媛県議会自由民主党
神道議員連盟

松下 行吉

今年、平成三十年は、明治改元から百五十年の節目の年です。日本の歴史から見ると百五十年という年月は、それほど長いものではないかもしれませんが、この間は近代の出発から現代に至る激動の時代です。特にその中間点では、太平洋戦争を戦い、敗戦を迎えています。戦後、日本は力強く立ち直りましたが、今、終戦から七十三年目を迎え、戦前・戦後の歩みを比べると、非常に似ていることに気が掛りを感じます。過去を振り返り、これからを見据える意味で、私の感じている百五十年の流れを記してみます。

日本は、明治改元から九年後に起こった西南戦争を経て、近代的な官僚体制が確立します。その後、日清戦争と日露戦争が起こりますが、その頃日本の近代工業の初期段階が完成（明治維新から三十年）しています。世界では、一九一四年に第一次世界大戦がはじまり一九一八年にイギリス陣営の勝利で終結します。戦争が終わると、世界的な対立軸がなくなり、一九二一年（明治維新から五十三年）にワシントン会議が開かれ、この会議で日本はイギリス、アメリカ、フランスとの四カ国条約を結び、日英同盟を破棄します。二十年も維持し、その間の大戦に耐えた日英同盟の破棄は、世界の中で日本の孤立を招いてしまいます。昭和に入ると景気の低

迷期に入ります。一九二九年に世界大恐慌が起こり、日本もその影響を受けて昭和恐慌（明治維新から六十三年）が起こり危機的な経済状況になります。軍部が満州事変、上海事変と独走し、明治維新から七十三年目、一九四一（昭和十六）年に太平洋戦争に突入してしまいます。

戦後の日本は、終戦から十年後に自由党と日本民主党の合同で自由民主党が結成され、先に行われた社会党再統一により五十五年体制が成立し、政治の構図が固まりました。そして、明治維新から三十年後に近代工業化が出来上がったように、沖縄返還、石油ショックを乗り越った日本は、終戦後三十年から三十五年頃に経済大国の地位を確かなものにします。一九八九年にベルリンの壁が崩壊、翌年東西冷戦が終結しますが、日本は、戦後四十五年間の努力と幸運により冷戦の勝ち組となります。冷戦が終わると、対立軸のなくなった世界は混沌とした状態となり、一九九七年（敗戦から五十二年）には、西側諸国の首脳会議だったサミットにロシアの大統領

が正式参加しています。この頃から日米の協調が薄れていったように思えます。二〇〇七年（終戦から六十二年）のアメリカの住宅バブル崩壊から翌年リーマンショックと国際的な金融危機が起こります。現在も世界の経済は、非常に不安定な状況になっています。また、北朝鮮の度重なる核開発とミサイル発射によって、東アジアは緊迫した情勢となっています。

このように、戦前と戦後は、非常に似た道を歩んでいます。しかし、「争い」を望んでいる国民は何処にもいません。私たちは、これから戦前とは違った道を歩むことを確信しています。そして、歴史から学ぶとすれば、戦前、日本が望んだことではありませんが、日英同盟を破棄し、やがて国際連盟脱退と世界の中で孤立してしまっただけで、日本の針路を誤らせた要因であることを考えると、六十年以上続く日米同盟の重要性を再認識するべきだと思います。

